

風雲録

雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 6
ページ	1 0 5 - 1 2 3
発行年	1899-12-23
URL	http://hdl.handle.net/2298/5477

風雲錄

紫洋逸人君に與ふ

(飄然生)

余昏愚にきて自ら其才をはからず、敢てみたりに紫洋逸人君の堂々たる學寮五分論に喙を容れたりき。豈はからんや、余が錯刀を以て、否一本の扇を以て、銳鋒と見あやまれ、續學寮五分論に於て、堂々そこを迎へられまは、余に取りて無上の光榮なると共に、又實に恐怖に堪へざる所なり。余劍を抜いで、君が銳鋒に向ふの勇なまど雖、いさゝか楯を以てこれを防がんと欲す。小癩な奴との御憤は御尤と存ずれど、しばらく御免を蒙らん。先づ、君は、余の先輩の事に就て云々せしを、堅白同異の辯となし、君子の取らざる所なりとか、何とか、七六かまき御講釋をなされて、さて、余を以て、何とか的分類を、有りといへば、何處まで有るが故に、萬物悉く異れり、無しといへば、何處までも、無きが故に、萬物悉く同じ、てふ筆法を以て、素人を瞞着せんと欲するものなり、となされたり。失敬ながら、拙者もさまで馬鹿ものにはあらず、君こそは君が所謂同異の辯士なるべけれ。何となれば、君は、五分論に於て、醫者の先輩は云々より説き來りて、焉んぞ河伯の狸に對するに異ならんや、といひながら、余が、君の眼孔のあまり小に過ぎ。又あまり一方に偏せるの嫌あるを以て、又一方より見は云々といひまを取りて以て、余が辯の君が論を胡魔化する能力なきものたることを説かれたり。余がいふ所は、以て君が論を胡魔化するに足らざることは、明々白々なり。然れども君試に思へ。此事實は以て、君の論が、いかに薄弱なるかを證明するに余あることを。之を撃

劍にたどへんか。君は面のみを防がんとて。胴にすぎまあるとを知らざるものあるに似たり。今傍に一人あり、君につけて曰く、胴を打たれざるやうに注意せられよと、君は即ち答へて曰はん、胴のみに用心せば即ち面をうたれんと、君が此答はよ。然れども、君が面のみを恐れて、胴を用心せざるを見ては、又誰か君の愚を笑はざらん。余は決て、君に胴のみに用心せよといひえにあらざるなり。余は敢て鋭鋒を君にむけたるにあらずとて、君が論の一方に偏せざるを咎めたるなり。然るに、君は、余を以て、面をわきて胴のみに注意するものとなし、同異の辯をなすものなりとて攻撃せられたり、^(a)々々見誤られたるにはあらずや。己れの論の欠點を告げられて、其欠點のある所を悟らず、又は悟りても、悟らざる眞似して、かへりて人を咎めんとす、嗚呼難い哉。次に君が、詳細の所は悉く讓歩しても決して苦しからずといはれえは、最も解釋に苦む所なり。實に異様に考へらるゝなり。君は、五分論に於て、君が所謂、平均主義の害は多々あれども、要するに(1)無意義の合同となすこと、及び、(2)地方團體の勃興を來せよと云ひ、細別すれば、(a)先進後進の別なきこと、(b)交際の程度薄きこと、及び、(c)社會的制裁を欠くこと、の類なりといひしにも拘はらず、(b)に就て堂々論を來りて第二の害、(c)に就て、長たらなく、尤らしく、説き來りたる第三の害、の如きは、些々たるものなりとし、歩を譲りても苦まからずといひ放たれたり。是に於て君が論せよ^(a)(b)(c)の箇條中、有功と認めらるゝものは、只^(a)先進後進の別なきことのみ。而て、此箇條は、君の所謂同異の辯を以て、美事に打破せらるゝものなることは、余が前にいひし所によりて明かなり。つまり君が五分論にて論じたりし^(a)(b)(c)の三箇條は、五分論構成に於て、何の益にもたゝぬ、一場の夢物語に過ぎざるなり。思ふに、此^(a)(b)(c)の三箇條は、君が所謂、(1)無意

義の合同より生ずる、弊害の主なる分類ならん。最後に残る所は、(2)地方團體の勃興を來せざるべし。則ち、君は他の數箇條は讓步えて、此地方團體の勃興を打破するに力を用ひんとするものか。尤も續學寮五分論に於て、君が論する所は、さきの五分論に於て論せし所と、少しく其方向と赴きを異にするやの觀あり、又笑ふべき論を挾まれたりしが如きも、そはまばらしく後まはしとして、『乞ふ後段を讀め』て御言を聴くまでの君が言により考ふれば、而して、此團體を打破すること到底能はざるは、君も認めつゝあると、君が論を見て明かに其證據を認むることを得るを以て、前々號の、君が學寮五分論は、全然功果なきものなり。君が論は、到底常識を有するものを、購着するの能力なきものなり。終りに君が余の言を以て、不整合なりとして、咎められたるは、恐入ることながら、此の點が最も可笑き所なり(君の論にして、不整合ならざる以上は、兎も角もなれど)各部分居は不可なり、學校を統一せざるべからず、共同の精神を養成せざるべからずと云ひて、其傍に地方團體は到底瓦解すべきものにあらず、否な瓦解すべからず、といふとも何の不都合あらん、何の不整合あらん。これを君が、地方團體の基礎薄弱なる輩を以て、十分なる各科分立をなまて、實際の程度を厚くし、社會的制裁を確にすることを得るものなり、となすの愚に比して、何れぞや。少しく反省せば、君も亦其の何れが不整合なるかを、明らかに了解せらるゝなるべし。續五分論に就いては、來春を俟つて、緩々御話敵手となり申さん。其外申たき事あれど、其折に残し置かん。寒威凜冽、君幸に自愛せよ。

續學寮五分論を評す

門外漢

紫洋君のものせられたる、學寮五分論は、幸にも讀者の眼を引くことを得て、茲に忠實なる駁論者瀧川飄然兩君をさへ、何の苦もなく、御手に入れられたり。蓋し辯難は、御互に智識を開展する所以、爭議は吾人の考を益々改良に持ち來たす所以、辯難爭議、決して吾人が心を、懊惱てふ位置に置かしむるの、不祥物たらざるなり。あゝ、紫洋君、瀧川君、飄然君、互に自信する所を戦はすは、大に吾人の賀せざるべからざる所なり。紫洋君自白えて曰く、最も余が恐れゑ所は、之を以て區々たる蝸牛角上の論以て議題となすに足らずとして、視線の外に遠ざけられんことにてありき。然るに瀧川及び飄然の兩君は、之を以て閑日の案となさず、或は研究するに價ありとか、或は通讀三四したりとか、種々なる褒辭を寄せられ、且つ最も丁寧懇切に、批評匡正の勞を取られたるは、實に生が過分の光榮とする所なり。と以て君が折角の議論、馬耳東風に附せられずして、有志諸君の注意を喚起するを得しを満足するの状を見る可し。かゝる熱心なる讀者を得しは、紫洋君に取りて、慥に悲むべからざる幸福たるや疑を容れざるなり。よき議論は相合はずとも、紫洋君の提出案が重きを置かれしことを反證するに於ては、毫毛も損失なければなり。荀子云はすや、我を非として當るものは、吾が師なり。と兩君の君に於けるは、少なくとも、愚人たるを失はざるなり。

夫れ之を撃て、益々鳴るものは、金石なり。之を防ぎて、益々激するものは、奔湍なり。紫洋君既に瀧川、飄然兩君の大打撃を受け、大阻礙（大阻礙とは少しく語弊を免れず。）に遇ふ。大に鳴る所なくして止まんや。大に激する所なくして終らんや。然り、君は鳴れり。激せり。激えて『飄然君の鋭鋒を迎ふ』瀧川君の強壓を避く』てふ二節となり。鳴りて『全校團結論』てふ一節となる。目

覺しき哉紫洋君、花々しき哉紫洋君、吾人は君の手腕を多にするに吝ならざるなり。空谷に居るものは、蹙音を聞きて喜ぶ。我が誌、近來批評なく、筆戰なく、寂寞寥々、寒山空谷も雷ならず。肉落ち、骨出でたる、青白き動物が、盛飾せる底の美文韻文は則ち之れあり。滿面に血を注ぎ、青筋を立て、口角沫を飛ばして、議論する底の快文は則ち無き。あゝ、讀者に對えて、大旱の雲霓てふ有様なりと言はざらむとするも、口遂に噤むを許さざるなり。此の時に當りて、遙かなる奇峯の岫より、僅かに雲霓の一端を吐きまものは、實に君が五分論なり。該論固より君が自稱する如く、或は大問題にあらざるべし。名作にあらざるべし。されども、雲霓の一端、空谷の蹙音とまては、慥に之を許すの價值あるものなり。吾人は讀者に於ける幾分の満足と思ふと共に、君が功を謝せざるを得ず。然り吾人は、君が功を嘉す、功を嘉するは、唯に君か討論駁議の筆戰を顯出せしを以て、何となく面白き面白きてふ輕躁なる考よりのとのみならず。吾人は固より輕躁なる性を受けたり。然れども、不幸なるかな、未だ面白き面白きてふ考のみによりて、直ちに人を嘉するまでに、輕躁ならざるなり。然らば、之れを嘉する所以の本尊は。いづれにかある。君が習學寮を改良して、竟に進で學校の大團結を形成せんとする熱情にあるや論なきなり。チンチコセー的に團結せよ、團結せよと誦して、未だ如何にまて團結すべきかを説くもの稀なる時代に於て、君獨り奮然として、其法を講ず。縱令其説は淺薄なるにもせよ、其説が現實に至ることなきにもせよ、其の心情に至りては、寔に一掬すべきものあり。若し幸にまて、其説淺薄ならずまて、現實に至るの絶無ならずとせんか、君が前途の望は、君をまて勇進するの動機を得せまひるものと謂ふ可き。

吾人は、頗る君が熱心を喜ぶ。故に君が熱瀝によりて成りし論文に對えて、吾人は多少眼を煩はす

を辭せず。是非を批評的に思考するの時間を吝まず。換言すれば、吾人は、ふつゝながらも、可成的眞面目に君が説を褒貶するの勞を厭はざるなり。若し其褒貶に於て當を得ざるあれば、是れ我が思想の薄弱と學識の淺陋とに由るもの、君其れ冷笑して可ならむのみ。

吾人は今五分論に就て、云云する所なかるべし。何となれば五分論に就ては、既に業に飄然、瀧川二君の評隲あれば、吾人が今更喋々すべきものにあらざればなり。廻ち吾人は君が一步を進めたる續五分論に就て、少まゝ見る所あらむとす。然れども續五分論内にも『飄然君の鋭鋒を迎ふ』瀧川君の強壓を避く』てふ二節は、専ら二君に對して、辯疏せしものに過ぎざれば、余にして、二君と符節を合するが如き、意見を有するに非ずんば、之が爲めに、多少の時間を費すの要なきなり。縱え縱令二君と等なき意見を有するにもせよ、之に向て、余が云々するは、人の權力を侵害するもの、吾人愚なりと雖も、決てせざるなり。願くは、吾人をして、かゝる行違を生ずるが如き、場所を通行することを止めて、全校團結論てふ大道に平々坦々たる歩行をなさめよ。否全校團結論も、また飄然、瀧川二君に關係なまぜず。只前二節に比えて、稍々關係の薄さのみ。然れども、吾人若え之をも憚りて言ふ所なからむか。是れ遂に口を噤えて止まざるべからざるなり。嗚呼、豈輕躁なる余の忍び得る所ならんや。

余は已に幾多の贅辯を重ねて、僅かに目的の地に達するを得たり。あはれ此の土地に於て、余はいかなる七顛八倒をなさんとするか。若し眩暈して、溝壑に落ち、幾多の負傷を受くるあらば、寧ろ吾人が幸とする所なり矣。

紫洋君は全校團結論の劈頭に叫で曰く、『余が五分案は實に是を以て第一の目的となすものなり。』と

可知全校團結論は、君が五分論の主人公なるを、かゝる少ならざる抱負の下に、君は屈する所なく、信ずる所是とする所を列べ立てられたり。其意氣や愛すべく、其渴望や大なりと謂ふ可き。夫れ學校の團結を缺ぐや既に久き矣。志士が團結の必要を唱ふるやまた至れり矣。而も其効驗なきや相變らず依然たり矣。否寧ろ分裂に於ては、一呎の深さを加ふるも、團結にまでは、一步の近接をもなさざるなり。見よや彼等の外觀的交際は、著々く進歩して、内心の憎惡は、互に甚はたえざるを加ふるあるを。彼等の涙は、睫を濕はえ、彼等の笑は、豐頬に滿つるも、彼等が心中の刃を、背けば則ち諷る底の卑劣心とは、遂に消失し去る能はざるを。妬忌は分離を生じ、分離は瓦解を意味す。分離、瓦解、第五高等學校の諸君が、將に到達せんとする、領土に非ずや。到達は蓋え喜悅の一部分なり。而も賀すべからざる到達にあらすや。あゝ、本校の現状は、誠に寒心すべきものあり。今にして之が矯正策を施さずんば、遂に救ふべからざらむとす。然れども、未だ一人の之が救済策を提出するものあらず。皆な唯だチンチコセー的に團結せよと言ふを知るのみ。此の時に方りて、紫洋君獨り奮て救済の術を講ず。吾人は君が大々の勇氣を賀せざるを得ざると共に、其問題の頗る大なるを思はずんばあらず。然るに君は續五分論の緒言に述べて曰く『自治制と舍監制との利害得失は、實に習學寮の根本的大問題なりと雖も、余が謂ふ所の學寮五分論の如きは些々たる末事に過ぎず。』と君何を苦んで爾く謙遜するや。吾人の見る所を以てすれば、君の問題は、舍監制と自治制との問題よりも、更に大なるを見るなり。然るに何を苦むで爾く謙遜する。後に至りて、余が五分論は實に全校の團結を以て、第一の目的となすものなりと大呼する丈の勇氣あるに、緒言に於て、かく御謙遜なくとも宜しき事に候はずや。

次に君は或る一流の誤謬の見を有する先生達に、一打撃を加へて曰く、『守り主義は、到底學校團結に毫毛の功なきなり。怪腕絶棒主義は、畢竟團結を形成するの方便にあらざるなり。』と然り思想の發達せる、學識の廣闊なる壯年は、無邪氣なる、蒙昧なる嬰兒の如く、シンプルなる口語に左右せられざるなり。白河の沙は、直ちにセメントを加へて、小口十間の立方体を作る能はざるなり。必ずや壯年を團結せしむるに足るべき術を求めざるべからず。立方体を形成するに足るべき法を企てざるべからず。是に於てか、單位の必要起る。君乃ち更に一步を進めて曰く、『此の種の工事に於て、先づ着手せざるべからざるは容積の單位を擇び之を以て方形若くは長方形を造るにあり。既にセメントを以て固められたる適當なる單位容積の砂塊を得んか、之を積みて大方形を築くは易々たるのみ。』と嗚呼、寔に斯の如し。沙礫を積むで、大方形を作らんと欲せば、君の論甚だ可なり。故に若きかゝる工事をなさんと欲するものあらば、吾人は當に君の論を擧げて、之に示さんとす。而も猶ほ吾人は此の論を以て、直ちに複雑なる人事に應用するを許すまでに寛大ならざるなり。即ち吾人は此筆法を以て、凡そ物を組織するには、單位を要するてふ事のみを説明せしに過ぎずとなさば、そは拒絶する限にあらす。否、大に首肯するものなり。即ち全校の團結をなすには、是非とも單位が必要なりと言ふに過ぎざれば、之を許さざるにあらす。然れども、或る單位を以て、沙の立方体を作るが如く、人間の團結を容易に形成せ得るとなさば、甚だき謬見といふべし。沙の單位は、容易にセメントを以て、粘着せまむることを得れども、人間の單位果してセメントを以て、粘着せしむることを得るか。沙の單位は、人間のなすまゝになれども、人間の單位は、人間のなすまゝになるものにあらす。然るに君明言えて、此の工事の設計は、實に余が學案五分論を説明するに

足るものありと言ひ、君の説に従へば恰も學校の團結は、此の工事の如く、容易く爲さ得るものなりと信するが如き狀あるは、何ぞや。かく論じ來れば、余は單位破壞者の如くにして前に單位の必要を述べ自らの言と、矛盾するものとなさん。然れども、是れ決えて矛盾せざるなり。何ぞや、吾人は學校の團結を形成するに、或る單位の必要なることは、百も千も是認する所なれども其單位が果して如何なる作用によりて、互に結合するに至るかの點を審議せざるべからず。さるに紫洋君が各部なる單位を設くるの要を説きて、其單位が如何なる點に於て、互に結合するの作用あるかを述べざるを憾となし、敢て苦言を列ふる所以なり。吾人は既に君が單位の大小辯は之を聞く事を得たり。願くは、更に進で、君が適當となす各部單位は、いかなる點に於て、學校團結の作用をなすものなるかを聞かん。君幸に我が蒙を啓くに吝なるなかれ。

學寮の團結がなえ得れば、學校全体の團結がさし得るかは、頗る疑問の價值あるものと信ず。即ち各所に三々五々散在し居るものが。學寮の團結に従て、草之に風を加ふれば偃す的に、團結するかは、疑を容れざるを得ず。然れども、吾人は今之に向て、深く問ふ所なかるべし。何となれば、吾人竟に團結を欲せざるものゝ如く、見做さるゝの不利を招くに過ぎざればなり。加之吾人は學寮に於て善く團結すれば、中堅牢乎たる學校なるを知るに躊躇せざればなり。

兎に角く、吾人は、紫洋君の五分論は、一説として大に取るべき所あるを信するものなり。故に吾人は、此の説を以て、徒らに雜誌上の觀せ物として、終らんよりは、學寮會に提出して、其利害を詮議せんことを願はざるを得ず。是蓋し紫洋君の本意なる歟。

公共義務を奉ずるの觀念

人は生ながらに於て社會的動物なり。決して單獨孤立して生存し得可きものに非ず。甲耕乙織る等。交互相扶けて然る後始めて完全圓滿なる生活を爲し得可きものなり。獨り人類のみならず。禽獸虫魚と雖も。稍少しく高等の域に達すれば。多少の分業法を設けて生活の途を開く。雄蜂の働き雌蜂の産むが如きは乃ち此類なり。假令人類と雖。未だ進歩せざる間は、甲奪乙掠。鬭爭是樂み。奪掠是事とす。彼の野蠻人の如きなり。然れども人類の智情少しく發達するに従ひ。奪掠の情に非ず。鬭爭の不利なるを知り。相扶け相待つて共同的社會を經成するの最も安樂にして而も最も便利なることを悟り。此に始めて社會を生ずるに至る。社會は人類の共同的行爲より生ず。共同的行爲は共同的精神の產物なり。夫れ共同的精神とは。人の爲めに他人の權利を侵害せざるなり。人に苦めらるゝを欲せざるが故に。他人を苦めず。人も亦之が爲に吾人を苦めず。人に掠めらるゝを欲せざるが故に。他人も亦吾人を掠めざるが如きなり。語を換へて之を云へば人は社會の爲に個人の權利を維持し。安寧幸福を享有することを得るが爲に。個人も亦之が報酬とて其權利の幾分を社會の犧牲とするの意なり。之を義務と云ふ。則ち個人は社會に對し當然盡さる可からざる、且つ守らざる可からざるの義務を有す。而て社會は其要求を待たずして各個人の權利を認むるが故に。各個人も亦社會に對し其要求を待たずして當然盡す可き且つ守る可き義務有るなり。義務の觀念は智の發達と共に増進するものにて、老者は幼者より進歩し賢者は愚者よりも發達せり。殊に高等の智識と情感とを有する吾人學生に於て最も好く發達せるの理なり。悲ひ哉智は益發達して道德日に進まず。智は人權を傷害するの利刃となり。義務を脱するの術數となり。人を苦め人を危ふするを

以て反て得々然たるもの有り。人は云ふ近世社會の發達は智識上物質上の發達にして。人間の最重要なる私利を折つて公共に犠牲とする道徳上の發達に非ず。人を憐み人を恵む情的精神的の發達に非ず。吾人は實に其言を非認する能はざるを悲むものなり。人智は如何程發達したるにせよ。物質上の進歩は如何程大なるにせよ。社會を組織する最大要素たる。公共義務を奉ずるの精神。相憐み相扶くるの同情にして進歩せざる間は。決して社會の發達進歩と云ふ可からざるなり。否智識上物質上の進歩にまて。同情公共心と不均なる發達を爲すは。寧ろ社會の秩序を紊亂す。之を轉覆するに至るの原因たらずんは非ず。古は人智未だ開けず。道徳未だ進まず。獨り社會の最上權を占めたるものは腕力にして。甲奪乙掠。天下顧然として其の堵に安んぜず。今は智力獨り大に發達し。詐偽百端人心洶々とまて。人を信せず約を守らず。離々索々營々として利已是計り。毫も他を顧みるものなく。甚きは苟も私權の侵害を受くれば。滔々とまて人權是論じ。他人に對まては毫も束縛制裁を受くるの理なしと云ふ。殊に九州最高等の學生を第する本校に於て。斯る偏見を抱き公共義務を奉ずるの觀念を有せざるもの有るは。實に嘆ず可きなり。彼の習學旅行規定第十一條第十三條を見よ。學校は何故に斯く嚴密なる兒戲的の規則を以て。諸君を束縛せざる可からざるか。夜寝ねて晝働くは日常の習慣なり。『殊更に規則を設けて之を強行するの要なし。然れども若し社會人民の大多數にして。晝寝ね夜働く如き惡習慣を生ずる有らば。政府は止むを得ず晝働き夜寝ぬ可しと云ふ兒戲的の規則を強行して。此の惡弊を救正せざる可からず。是か爲に或特別の事故に因りて。晝寝夜働せざる可からざる者迄も。此規則に束縛せられざる可からざるの不便有り。是決まて政府の罪に非ざるなり。晝寝夜働の惡習慣を有する人民の罪なり。』等々く斯かる嚴密なる規則を設

けたるものは。決て學校の罪に非ず。諸君が自ら招きたる自業自得の結果なり。見よ昨年一昨年
の修學旅行を。出發の期日に先づ數日にして。遂に病と稱して醫師の診斷を受け。以て從軍を免か
れんとせよもの。二百五十人以上に上ばり。且つ其認可を得ず止むを得ずして從軍せしものすら少
からざりてに非ずや。已に出發の當日若くは前日となれば。『ハヤク歸レ』の飛電陸續相次て至る。吾
人愚にして。如何なれば修學旅行が近づけば。斯く突然多くの病人を生じ。家歸の召還を要する事
故増加するものなるかを知る能はざるなり。則ち吾人は是等の多數を以て。公共義務を奉するの觀
念に乏しきものとす。速斷ならざることを信ずるものなり。腦病乃至神系衰弱の如き。醫師の
最も判斷に苦む病質の多きが如き。學校の最も許さるを得ざる至急電報の少からざるが如きは。
吾人をして是等の輩が。多くは從軍を拒む可き十分の口實なきが故に。止むを得ず是等の手段に出
でたるものと考へざるを得ざらしむ。修學旅行の要不要。其方法の善惡は暫く言はず。獨り本校の
みならず。全國各學校が目下之を實行まつゝ有る以上は。必ずや其必要飲ぐ可からざるものなくん
ば非ず。既に學校が其必要を認め。一個の課定とて諸君に課する以上は。他に十分の口實否事情
有るに非ずんば。諸君の公共心に訴へ。諸君は決して不實の口實を以て之を免かるゝ能はざるなり
思へ。苟も常識を有するものは。縱令修學旅行が近づけばとて。半數に垂々たる病人急用者を生ず
可まど考ふるもの有るか。是學校が斯かる嚴密なる規定を設けたる所以に於て。決して好んで爲せ
る所に非ざること明なり。其他倫理講座に繩を張つて人員の檢閲を嚴にせるが如き。大祭日の式を
終つて後出席を點呼するに至れるが如きは。皆是諸君が公共心の缺乏より於て。當然盡す可きの義
務を盡さざるが故に。學校は止むを得ずして此手段に出でたるものなること明なり。思慮此に及ば

すして。素りに學校の過刻なるを痴言つが如きは。大に其意を得ざる所なり。如斯學生は公共義務を奉ずるの觀念少きが故に。學校は止むを得ず規則を以て之を強行し。規則愈嚴にして學生が之を免かるゝの術愈長す。諸君は決して學校を怨むの要なし、唯た自から顧みて其公共義務を奉ずるの觀念有りや無しやを思へ。諸君にまて若し是等の觀念。且つ其義務を遂行するの意有らば。學校の規則は如何程嚴なりと雖ども。諸君に於て何か有らん。何となれば校規は素より密ならざるに非ずと雖も。是諸君が當然行はざる可からざる所なればなり。

若玄歩を轉じて本校校風の基礎たる習學寮に入らんか。南北兩寮の通路を照せる洋燈は。夜間其用を爲え居るもの果えて幾個か有る。是等は最も公共心に欠乏せる二三輩の行爲にまて。彼等是一個人の爲に洋燈を竊取して通路を暗黒にし。以て一般寮友か澹吐、其他棟の續目なる踏石、戸扉等に蹴くをも顧みざるのみならず。不法にも洋燈を持つて寢室に入り。通夜之を點じて他人の安眠を妨害し。且つ危険を與ふること少からず。或は制限に先つて食堂に亂入し。他人の遅參せるを幸とて其業を竊食し汁をつぐに具を蒐め。飯をつぐに中を掘るが如きは。是亦公共心に欠乏せるものには非ざるか。殊に斯かる陋劣見るに堪へざる行爲を爲すものは。寧ろ舊生徒に多まど爲す。彼等は新來の諸君が。萬事控へ目なるを機とて。平然とまて斯かる行爲を爲すなり。

嗚呼龍南の氣風消沈するや既に久え。豪氣は變して懦弱となり。質朴は化して奢侈となり。智は奸を蒙むり。禮は冷と訓す。室長は茶話會の發起者となり。組總代は休課の談判委員となり。義務果さず。制裁行はれず。稱えて高等學生と云へども。威なき無氣力無精神なる走屍行肉。擧げて一校と云へども。離々索々公共心義務を奉ずるの觀念なき。而かも校風なき蠢動的動物園のみ。嗚呼來れ吾

黨の奸男兒。廉耻を知るの快活少年。公共義務を奉ずるの精神有る、頑骨漢。苟も廉耻を知らず。公共義務を奉ずるの觀念なきものは。新入生たると舊入生たるとを問はず。眞に是大膽にも耻づべき行爲を爲すもの。苟も彼等に對する善意より出で。公共義務を奉ずるの觀念より出づる以上は。面責可なり。痛罵可なり。制裁可なり。苟も彼等を矯正するの道有らば。吾人は終に其策を撰ぶの暇なきなり。

(想峯)

高知縣人の美舉

雲山萬里遠く異郷の地に起臥棲息する吾人にて。最も必要を感ふ。最も扶掖せらるゝものは朋友なり。然れども異郷に於て得たる朋友は多くは是浮雲の友。朝に手を執つて相語り。夕に肺肝を吐露して相談笑すと雖も。一たび不幸不遇の身となること有れば。途上猶ほ相知らざるものゝ如く。殊に利害に臨んでは。蹶起狂奔。相排擠すること仇敵よりも尙ほ甚しきもの有り。若し夫の利害境遇に因て其交を變へず。誠に人を愛ふ苦樂を共にするの考を以て交際する。眞の朋友に至つては。甚だ得易からざるものなり。吾人は異郷の空に在るども。知己朋友固より得可からずとなさず。然れども唯利害苦樂に於て常に扶掖せらるゝものは。同一縣下に在つて。殊に同一中學に學び。多年苦樂を共にし。同一風俗。同一方言を慣用せ來れる。同縣學友の外なきなり。

方今天下道德地を掃ふと雖も。西海の邊嶺は淳朴の風存する有り。郷友相親み相扶くるの情未だ全く消失せず。縣と云ひ藩と稱ふ各俱樂部を組織し。以て朋友間の親和を圖るのみならず。勸誘懲戒を行ふもの有るは。實に嘉みす可き所なり。固より是等地方的の感情は。用ひ様に因りては大に嫌

思す可き處なきに非ずと雖も。是を用ふるの法宜しきを得る時は。其効果亦計る可からざるもの有るなり。(利害用法の點に就きては次號に詳論す可し)

秋極まつて殘菊展を示し。冬到つて松柏節現はる。事物の眞象は決して其常態に於て察す可からず。然れば則ち本校生徒の組織せる各府縣學生も。皆等しく斯かる美風無しと云ふ可からずと雖。高知縣人一同の如きは。實に吾人が特筆大書えて其美風を賞讃ま。以て各地學生の好模範とまて。長く忘るゝ能はざるものなり。

見よ先きに高知縣人石川正緒君の病むや。同縣人は夜となく晝となく。交るゝ其枕邊に在つて看護怠らず。藥石効無く遂に長逝するに及んでや。一七日の間は腕に黒布をまどうて喪意を表ま。東走西奔えて其始末に盡力ま。骨を飲めて假葬式を行ふ。其間時を費ま金を抛ち。苦心盡力する所。幾何なるかを知らず。今川村君の逝くに及んでも。亦毫も前者に異らず。殊に病室の周旋。遺骸看守の愁狀の如きは。見ず知らずの他人さへも。尙ほ且つ涙を流せりと云ふ。

斯の如きは一見儀式的なるが如まと雖。苟も外貌行爲に於て人を評するの外。夫の所謂天眼通なるものを有せざる以上は。當時彼等か動作の溫寂にして容貌の枯焦せる。言語談話の少くして而も其音聲の底微なる。用意の周到にして準備の行き届きたるが如ま。吾人は遂に如何なる冷眼を以て是を觀察すると雖。彼等か心底より悲哀と熱心とを以て。之に盡力またりとの外視る能はざるなり。聞くならく土佐人は豪放不羈の風有りと。吾人は此に於て始めて其獨り豪放不羈の氣骨有るのみならず。又以て情誼摯す可きもの有るを知るなり。

嗚呼高知縣人は吾人に對えて。沸季の際交情紙の如ま今日に於てすらも。猶ほ且眞の所謂朋友の情

誼なるもの有るを示せり。吾人は千古萬古肝に銘し。決て此美譽有りし事を忘るゝ可からざるなり。否唯に之を忘れざるのみならず。眞箇の好模範とて摸放せざる可からざるものなり。

平民的詩歌

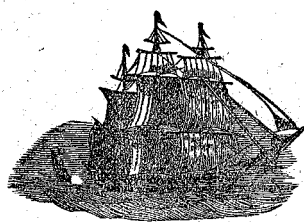
旭旗一たび渤海灣頭に翻つてより以來。文武併進既に世界の諸文明國と比肩競争するに至れる今日の日本は。又昔日の日本に非ざるなり。既に國家にして鎖港的狀態に非ざる以上は、人民も亦決して悠々閑々として從來の嶋國的觀念を保守す可からざるなり。人民の思想觀念行爲狀態既に嶋國的に非ずんば。是等を表發する詩歌文章に於ても亦大に其面目を刷新する所なかる可からず。然れども我國には我國の特風有り。言語文章に於ても亦それ〴〵古來相傳の特色なくんば非ず。國民の特風は國體の骨子なり。言語文章の特色は國語の根元なり。要と不要とに拘らず直ちに採つて歐洲的にせよと云ふに非ず。然れども國民の特風に於て建國の基礎に矛盾するもの有らば改む可き。言語に於て思想を現はすに足らざるもの有らば。補修して以て其用を足らす可き。縱令從來の特風特色と雖も。其害有り若しくは不足なるを知りながら。之を改良補修せざるは。反て國體を尊び國語を重んずる所以に非ず。縱令國體を尊び國語を重んずるものにせよ。決て其の進歩を計り發達を希ふ。眞に國語國體に忠實なる所以に非ざるなり。國體の基礎根元は固より依然として千古更らずと雖も。其枝葉の繁昌發達に至つては着々其武歩を進めつゝ有るなり。然れども之に伴ふ國語の進歩は果して如何。從來の國語は果して完全無缺のものなるか。若し完全ならずとせば之が改良進歩を計るは吾人が目下の要務なりと信ず。國語改良全般に關しては暫時らく言はず。唯だ彼の言語文章

の一致融和を計るは。最も平近にして而も要用なる一事件に非ずや。然れども突然之が改革を稱ふるは。口言ふ可くえて到底行はれ得可き事實に非ず。而して之か最初の手段とては。則ち容赦なく文章中に俗語を混用するに在り。況んや文章語の不足を補扶する最良手段なるに於てをや。獨り文章のみに非ず。詩歌に於ても尙ほ且つ混用す可きなり。喜ふ可き本校文壇に於ても。往々此種の文を見るに至るは。然れども詩歌欄内に於ては未だ全然舊衣を脱する能はざるもの有り。吾人必ずしも舊衣を脱せよと云ふに非ず。然れども舊體の詩歌殊に三十一文字の短歌になすみ。思想用語句法に至る迄。一つも新機軸を出せるものなきを嘆するものなり。

詩歌に於て最も重要なものは。夫の思想。言語。句調、の三點に在るや言を待たず。されば彼の五七句調の短歌と雖も。此點に於て探る可きもの有らば。決して之を排斥するものに非ず。唯だ一般に言は。本誌上に紹介さるゝ短歌の多くは。舊來陳腐の詞句を綴り合せたるに過ぎざるなり。素より國語は千古に一貫せるものにして。新句新詞は無限に造出せ得可きものに有らずと云は。則可なり。然れども詞句多くは是古人の言ひたるものにして。其思想も亦嘗て古人が咏きたる思想の燒き直はしなるのみ。既に古人の咏せし題に對し。古人の咏きたる思想を燒きなほし。古人の咏したる詞句を排列するに於ては。吾人の感を引き足らざるものたるや勿論のことなり。何となれば詩歌の大本營たる思想に於て飲ぐればなり。言詞句調固より必要ならずとせず。然れども詩歌の本色は心機に感ぜざる思想有るに在り。句調言詞は如何程麗朗なるにせよ。苟も思想に乏て陳腐若しくは淺薄に。人間心胸の琴線に觸攪えて。美妙の感應を呈するに足らずんば。唯だ滑かに削り上げたる大理石の如く。質固より惡きと云ふに非されども。決して吾人の感情を動かすに足らざるなり。

要するに從來本誌に掲けたる短歌の多くは。言語句調の上に於て多少成效せるものなきに非ずと雖ども。詩歌に於て最重最要なる思想の點に於て欠乏せり。乃ち機械的に排列したる言語の集合なり。殊に從來古今乃至新古今に用ひ來れる詩的言語に非されば。是を用ふるを屑まどせざるの風有るが故に。《鄙見》。苟も新事物に遭遇すれば。直接其感慨を咏出すること能はず。強ひて古歌の思想稍類似せるものより借用し來るものゝ如し。是故に咏歌固より少まどなさずと雖も。要するに千篇一律にして。吾人の感を引くに足るもの無し。

今此に一大先生有り。學該博にまて鍛鍊日久ま。詞句に於て最も熟するとせんか。詞句の配置は縱令無類飛切なりと雖。先生の思想にして涸竭せる有らば。則ち詩家歌人どまては三文の價值だにもなし。言語は縱令優美ならずと雖も。句調は縱令華麗ならずと雖も。苟も思想にして見る可きもの有らば。尙且つ讀むに耐へたり。若し夫れ思想なきに至つては。朽ちたる木の如く。言語句調は如何程精選せりと雖。遂に一顧の價值だにも無かる可ま。言語は必しも從來慣用のものゝみに限らず。句調は必ずしも五七調ならざる可からざるにも非ず。俗語可なり。鄙語可なり。一つとや調可なり。苟も高尚幽妙なる思想を現はすに於て必要なる限りは。遠慮なく是等の句調により。是等の言語を用ふ可し。是寧ろ骨董店の隅より搜へ出たるが如き。從來の詩語詩調を用ふるよりも。思想を顯はすに便利にして。而も滋味あるものなり。既に今日の日本は舊來の嶋國的日本に非されば。彼の所謂偏見的國粹保存論者の稱ふるが如く。文章は古文的に。詩歌は萬葉乃至古今的などの愚論を固執す可き時代に非ず。尤も是等も一種の古體として存するは決して不可なるとなまど雖。是等以外には詩歌なるもの無さか如きの觀を爲すに至つては。愚も亦甚しからずや。吾人の所謂理想の



詩なるものは。一派の學者に非ざるよりは。之か解釋を爲すこと能はざるが如き。貴族的詩歌に非ず。寧ろ凡百平民の歡迎に値する平民的の詩歌なりとす。詩の目的よりするとも。猶は彼の所謂一大先生の賛辭を受くるよりも。凡百平民の歡迎に値する方、詩歌に於て成効せる所多しと信するなり。要するに吾人の希望する所は。從來の詩歌より猶は一層歩を進めて。俗語鄙語の如きも。用捨なく是を用ふるを許し。全力を言語に注かしむるよりも寧ろ思想に注がえむるに在り。

(想峰)